

真田邸プロジェクションマッピング テーマ「希望～hope～」

報道機関向け説明資料

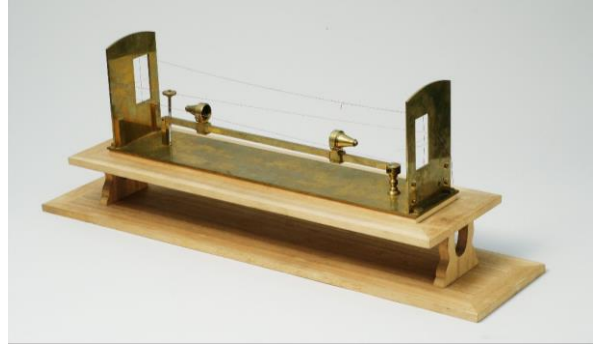
江戸後期の松代藩は、芸術や文化が豊かに花開いた時代でした。

今回のプロジェクションマッピングでは、文化振興を奨励した松代藩8代藩主・真田幸貫(1791-1852)や、幕末の先覚者と称される佐久間象山(1811-1864)などの時代の所蔵品を軸に、真田家に残された数多くの資料などから、江戸時代の技術の高さや、日本文化の多様性と豊かさを表現しています。

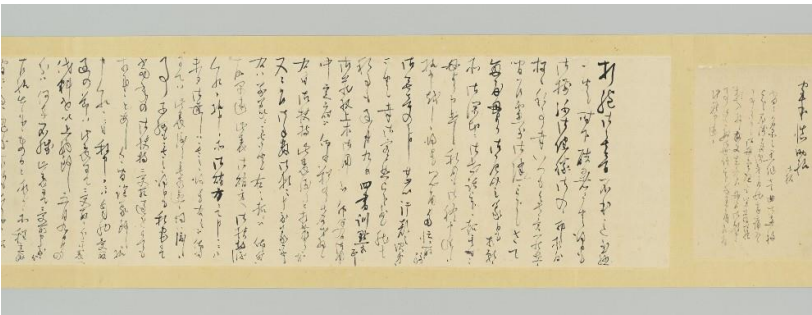
プロジェクションマッピングに使用した素材の一部(いずれも真田宝物館所蔵)



真田幸貫作 御手焼き 香合



佐久間象山 測量用水準器



佐久間象山 書状



花鳥図巻

松代藩主・酒井雪谷筆と伝えられている。

直垂・陣羽織



直垂

明治2年(1869)に新調された10代藩主・真田幸民所用の鎧直垂。



陣羽織

8代藩主・真田幸貫所用と伝えられる。綴錦牡丹模様金に定紋が織出されている。



陣羽織

8代藩主・真田幸貫所用と伝えられる。赤地錦雲竜模様に金で六連銭が織出されている。

今回のプロジェクションマッピングには、各機関から許可をいただき、松代とゆかりのある葛飾北斎の画も使用しています。

■上町 祭屋台 天井絵 葛飾北斎 筆(額絵は下絵のみ) 北斎館(協力:小布施町上町自治会)

天保13年(1842)、北斎は83歳の頃に初めて信州小布施を訪れました。そのきっかけは、幕府の天保の改革によって江戸では絵の制作が制限されたとも、地元の豪農・豪商の高井鴻山(1806-1883)の招きに応じて訪れたとも、さまざまな説があります。

その頃、北斎は、小布施で祭り屋台の天井画という素晴らしい画を残しています。

祭り屋台は県宝に指定されており、今も小布施の「北斎館」で見ることができます。



上町祭屋台天井絵「男浪(おなみ)」



上町祭屋台天井絵「女浪(めなみ)」

■日新除魔図(天保13~14年(1842~43)制作) 葛飾北斎筆 重要文化財 (所蔵:九州国立博物館)

北斎は83歳を迎えた天保13年(1842)から翌14年にかけて、「日新たに魔を除く」ことを願い、ほぼ毎朝、獅子や獅子にゆかりのある人物などを日課として描きました。

注文に応じて制作した作品とは異なり、画家本人が厄除けのために描くという非常にプライベートな性質の資料としても、極めて高い価値をもちます。半紙に表された小型の獅子図は、国内外のコレクションに点在し、そのなかでも九州国立博物館は219枚という最もまとまった数を収蔵。これは、88歳になった北斎が信州松代藩士・宮本慎助に贈ったものとして知られています。その画は、今は九州国立博物館に所蔵されています。



日新除魔図 出典: ColBase
(<https://colbase.nich.go.jp/>)